

2016/9/1

しろひげ@Kurobane です。

9月になりました。

地球の裏側で繰り広げられた世界の祭典に酔いしれている間にも、季節は確実に移ったようです。

とげとげしいほどに明るかった光も脂っこさを失い、身を潜めていた秋が姿を見せ始めました。

リオの祭りの余韻もまだ消えていないせいか、熱く狂おしい夏が残した気だるさが平年の比ではありません。

晩夏は胸に一抹の感傷を引くのが常ですが、今年はことさら二人の歌い手の旋律が耳の底に流れます。

祭りのあとの淋しさは  
死んだ女にくれてやろう  
祭りのあとの淋しさは  
死んだ男にくれてやろう (『祭りのあと』 歌: 吉田 拓郎)

過激な歌詞がむしろ、17日間の喧騒から、心を解き放ってくれそうな気がします。

<ゆく夏に / 名残る暑さは夕焼けを / 吸って燃え立つ葉鶏頭…>

和歌を思わせる語調と鮮烈な情景で始まる松任谷由美さんの「晩夏」は優しい秋を待つ私たちの心境に寄り添います。

例年のことながら、晩夏の感傷は非日常的なさまざまなできごとを、特別な記憶となつて、胸底にゆっくりと沈みこませるのでしょう。

実りの秋、その実りを分け合う人がいる幸せを、あらためてかみ締めながら、一年の3分の1のスタートを切りましょう。

黒羽根整形外科  
黒羽根洋司